



The Japanese Association
of Organic Geochemists

Newsletter

Organic Geochemistry 60

Jan 7, 2015

目次

Report	2
第 32 回有機地球化学シンポジウム(2014 年湯河原シンポジウム) 開催される 2014 年度有機地球化学会 有機地球化学賞 (学術賞)、研究奨励賞 (田口賞) 受賞者決まる	
People	5
アメリカでの海洋有機物研究 山口 保彦	
Overseas Report	7
Faraday Discussions ってご存知ですか? 大場 康弘	
Invitation	10
河村 公隆	
Information	11
2014 年度総会議事録／年会費納入のお願い	
Announcement	20
有機地球化学賞 (学術賞) 2015 年度受賞候補者推薦の募集 研究奨励賞 (田口賞) 2015 年度受賞候補者の募集 ROG へ論文を投稿しましょう!!	
編集後記	22

Report

第32回有機地球化学シンポジウム (2014年湯河原シンポジウム) 開催される

2014 年湯河原シンポジウムは、11 月5～8 日にかけて、湯河原温泉のホテル「ニューウェルシティ湯河原」にて合宿形式で開催されました。参加者総数60 名（一般37 名、学生23 名）で、皆様の日頃の先端的研究や、個性、創造性のあふれる分野横断的な研究について、招待講演 4 件、口頭25 件、ポスター14 件の発表が行われました。熱く活発で、かつ、建設的な議論の場になったのであれば幸いです。

世話人一同



平成 26 年 11 月 7 日 ニューウェルシティ湯河原 大観の間にて



湯河原町長 富田 幸宏様よりご挨拶をいただきました



懇親会の風景



学生ポスター賞を受賞した高橋幸士会員（北大）

2014 年度有機地球化学会 有機地球化学賞（学術賞）、 研究奨励賞（田口賞）受賞者決まる

2014年度有機地球化学賞（学術賞）は、選考委員会で審議された後、運営委員会において、三瓶良和会員に贈ることが承認されました。2014年度総会後に表彰式が行われ、賞状と記念メダルが河村会長から三瓶会員に授与されました。おめでとうございます。

有機地球化学賞（学術賞）第12号

受賞者：三瓶 良和 会員

受賞題目：「石油天然ガス根源岩の堆積環境に関する有機地球化学」

受賞理由

三瓶良和会員は、現世堆積物から得られる知見をもとにして石油天然ガス根源岩の形成と堆積環境を理解するための有機地球化学的研究に積極的に取り組んできました。同会員は、有機物に富む堆積物が形成される堆積場として汽水湖である中海・宍道湖に着目し、半閉鎖的堆積盆地における石油天然ガス根源岩の形成に関する有機地球化学の知見を発展させてきました。多数の中海・宍道湖堆積物について ^{14}C 年代値、全有機炭素 (TOC)・窒素 (N)・硫黄 (S) 濃度を測定し、堆積速度・TOC 濃度・陸源有機物相対量の相互関係を明らかにしました。また、堆積物の C/S 比と貧酸素堆積環境の関係や C/N 比に及ぼす無機態窒素の影響についても定量的に考察し解明しています。その結果、半閉鎖的堆積盆地における堆積作用－酸化還元性－基礎生産性の関係を TOC、N、S 濃度に基づいて明快に説明することに成功しました。これら一連の研究成果は国際誌である *Marine Chem.*、*Palaeo 3*、*Geochem. J.* に掲載され、これまでに合計 150 回以上引用されており、国際的に高く評価されてい



ます。

中海・宍道湖の現世堆積物に関する研究から得られた研究成果は、日本、ミャンマー、バングラデシュ、コロンビアなどの地質時代堆積岩に適用され、石油天然ガス根源岩の形成とその堆積環境に関する多くの論文にまとめられ、国際学術誌で公表されています。例えば、中海で得られた堆積速度・TOC 濃度・陸源有機物相対量の相互関係は、バングラデシュ東部のシレット堆積盆地に適用されています。シレット堆積盆地では、中期中新世以降に後背地であるヒマラヤ山脈の隆起によって泥質碎屑物の供給量が急増したため、根源岩の TOC 濃度の低下と陸源有機物の相対的な増加をもたらし、石油タイプの根源岩が天然ガスタイプに変化したことを初めて明らかにしました。

一方、石油根源岩中の有機分子に関する研究でも重要な成果を得ており、アルケノン由来と考えられる $n\text{C}_{37-38}$ アルカンを日本の代表的な石油根源岩である女川層珪質頁岩から初めて検出し、その有機地球化学的意義について考察しています。堆積岩有機物の分子構造や組成の変化に関する速度論的研究や、有機物の熟成指標に関する研究でも顕著な成果を上げています。そのほか、マグマが関与する高温での有機物変化についても新しい知見を得るなど、他分野と

の研究交流を通じて有機地球化学の発展と普及に多大な貢献をしてきました。

三瓶会員は日本有機地球化学会の運営委員、および本学会の学会誌である *Researches in Organic Geochemistry* の編集委員長を長年に渡って務めてきました。ROG 編集委員長を 2007 年から 2012 年まで 6 年間にわたって務めていますが、その間、新たな試みとして特集号を 3 度発行しています。本学会シンポジウムの世話人も積極的に引き受けており、日本有機地球化学会の活性化と発展への貢献も顕著です。以上のことから、三瓶会員は本学会の有機地球化学賞(学術賞)の受賞者に相応しく、同賞を授与するものであります。

(有機地球化学賞(学術賞)選考委員会
委員長 鈴木 德行)

2014年度研究奨励賞(田口賞)は、同賞選考委員会で審議された後、運営委員会において、齊藤諒介会員に授与することが承認されました。2014年度総会後に表彰式が行われ、賞状と副賞5万円が齊藤会員に贈られました。おめでとうございます。

研究奨励賞(田口賞)第17号

受賞者：齊藤 諒介 会員(東北大学大学院理学研究科地学専攻)

受賞題目：「ペルム紀末大量絶滅直後の前期-中期三畳紀の酸化還元環境と生物の復元」

選考委員会所見

齊藤諒介会員は、海陸両方の生物相および環境変動を捉えられる堆積有機分子の特性を生かして、前期-中期三畳紀の酸化還元環境と生物の復元を行い、ペルム紀末の最大の大量絶滅後の生物の回復の遅れの実態とその理由



について明らかにした。また、酸化還元環境に関する堆積有機分子の指標と元素の指標および骨格化石の産出との間に整合的な関係を見出した。この時代の有機地球化学的手法によるこれらの先行研究はなく、本研究が初となる。これらの研究成果は、卒業研究から現在(東北大学大学院後期課程2年)までの5年で、3編の査読付き筆頭論文にまとめられて著名な国際誌に公表されている。以下はその概要である。

- ・ 南中国で採取した堆積岩試料を用いて、ペルム紀末大量絶滅直後の前期-中期三畳紀を対象に堆積有機分子分析と元素分析により酸化還元環境の復元を行い、南中国の大陸棚上の海において、還元的環境が繰り返し発生していたことを明らかにした。特に前期三畳紀後期においては還元的環境が有光域にまで達していたことがわかった。この還元環境の発達は大質量絶滅後の生物回復を遅らせた原因のひとつと考えられる (Saito et al., 2014, *Organic Geochemistry*)。ペルム紀末大量絶滅後の前期-中期三畳紀は環境の悪化が引き続き繰り返されていたとされているが、この期間全体を対象とした有機地球化学的手法による先行研究はなく、本研究が初となる。
- ・ 南中国で採取した同時代堆積岩試料に含まれるエーテル脂質を用いて古環境復元を行った (Saito et al., 2013, *Organic Geochemistry*)。先白亜系からはエーテル脂質がいまだに報告されておらず、本報

告が初である。

- ・ 同試料中有機分子の分析により、大量絶滅後、陸上では木本に代わりシダ植物やコケ類優勢の植生となり、約 200 万年後に針葉樹が優勢な植生へと変化したことを明らかにした。同時期に海洋で湧昇流の強まりが起こっていることも明らかにし、極端温暖化後の寒冷化イベントがこの植生変化をもたらした可能性を指摘した (Saito et al., 2013, Global and Planetary Change)。堆積有機分子によりこの時代の

植生変化を捉えたのはこれが初めてである。

以上のように、齊藤諒介会員は、生物大量絶滅時における環境変動と生物の応答に関して優れた有機地球化学的研究を行い、将来も更なる発展が期待できる有望な若手研究者であるため、研究奨励賞（田口賞）を受賞するに相応しいと判断される。

（研究奨励賞（田口賞）選考委員会）

People

今回の People は、アメリカに滞在中の山口 保彦さん（学振 PD・東京大学）にご寄稿いただきました。

アメリカでの海洋有機物研究

東京大学大学院理学系研究科 地球惑星科学専攻・日本学術振興会特別研究員 PD
山口 保彦

山口保彦と申します。2013 年 3 月に東京大学で学位を取得した後、アメリカのカリフォルニア大学サンタクルーズ校 (UCSC) にポスドクとして約 1 年半 (2013 年 6 月～2014 年 12 月) 滞在して、海洋有機物の研究を行ってきました。この記事では、自己紹介がてら、主にアメリカ滞在の経緯や研究生活の様子などについて紹介させていただきます。

サンタクルーズは、サンフランシスコから約 100 km 南（自動車ですら 2 時間ほど）にある、モントレー湾に面した小規模な街です。カリフォルニア海流の影響もあり、夏は涼しく冬は暖かい（最高気温が一年を通じて 20℃前後！）という、理想的な気候環境です。そして UCSC のキャンパスは自然に溢れています。「緑が多い」というレベルではなく、「森の中に建物が点在している」という状態です。専攻の建物から食堂へは峡谷にかかる橋を渡って行きますし、キャンパス内には様々な動物

（シカ、リス、アライグマ、Banana Slug、Mountain Lion など...）が闊歩しています。

さて研究の話に移ると、私の興味の対象は、広く言えば「物質循環や気候変動など惑星規模の現象に、生命活動がどのような影響を与えているか／与えてきたか」です。大学院では、海洋堆積物中において有機物動態に微生物活動が与える影響を、培養した微生物や海



ハワイ沖 Station ALOHA での航海の集合写真。前列右から 2 番目が筆者 (2014 年 3 月ハワイ沖)。

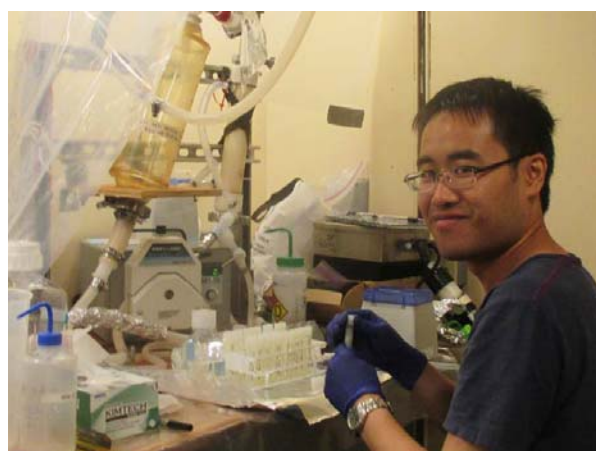
洋堆積物コア中のアミノ酸窒素同位体組成分析などから研究しました。東京大学大気海洋研究所の横山祐典先生の研究室に所属しつつ、実験は主に JAMSTEC の大河内直彦さん、力石嘉人さん、高野淑識さんらのグループにお世話になっていました。ちきゅうや JOIDES Resolution による海洋底掘削航海にも、大学院の間に計 3 回乗船する機会を得ました。特に D1 の秋に参加した IODP Exp.329 (南太平洋環流海底下生命圏) は、サイエンスの面でももちろんエキサイティングでしたが、それ以上に様々な国の研究者・学生たちとの 2 ヶ月間の濃密な交流が、強烈に印象に残りました。

D2 の後半にもなると、博士号取得後の進路についても色々と考えます。IODP の経験の影響もあり、なるべく海外に出てポスドクとして研究したいと考えていたので、まずは日本学術振興会の海外特別研究員 (海外学振) を狙うことにしました。色々と検討した末に行き先の第一候補としたのが、D2 の夏に参加した学会 (スイスでの IMOG 2011) で出会っていた、UCSC の Matthew McCarthy 准教授です。McCarthy 准教授の研究室でもアミノ酸同位体組成を用いた研究に力を入れており、海洋有機物循環、古海洋、食物網解析など様々な対象へと応用しています。なので、私の大学院時代の研究テーマから最も近い海外の研究室と言え、研究テーマを効率よく発展させやすいと考えました。

D2 の冬に参加した学会 (Ocean Sciences Meeting 2012) で McCarthy 准教授と再度会った際に、海外学振に申請する旨を快諾してもらい、具体的な研究プロジェクトについても議論することができました。そして D3 の春に申請したわけですが、そうそう簡単にはいかず、面接まで進むも海外学振には不採用となっていました (D3 秋)。その後、McCarthy 准教授の研究費でポスドクとして 1 年雇えるという話も出ていました (なので海外学振の

申請は、海外の研究者に「仲間」として認識してもらえるキッカケになりうるので、たとえ不採用になっても、とりあえず申請しておくのも重要なかもしれません)。ですが、学位審査も終わった D3 終盤 (1 月末) になって、併願していた日本学術振興会特別研究員 PD (学振 PD) の採用通知が届きました (2012 年 12 月の政権交代の余波を受け、この年は採用通知が非常に遅れました...)。そこで、学振 PD の研究計画にも McCarthy 准教授との共同研究を元々含めていたので、学振 PD の海外渡航として UCSC に 1 年半滞在して研究することにしました。快く送り出していただいた、学振 PD 受入先の東大の鈴木庸平准教授には、感謝いたします。

UCSC では、大学院時代とは研究対象を変えて、主に海水中の溶存態有機物 (DOM) や懸濁態有機物 (POM) の動態、特に海洋バクテリアの影響について研究することにしました。海洋堆積物と比べて、より短い時間スケールで物質循環や気候変動と相互作用する系だと言えます。堆積物と海水では、同じ海洋環境とはいえ、研究の作法や必要な知識がかなり異なり、勉強になることが多くありました。メインの研究手法は大学院時代から変わらず「アミノ酸窒素同位体組成分析によって有機物のソースを特定する」ですが、夾雑物



ハワイ沖の海水から POM を採取している筆者 (2014 年 8 月ハワイ沖)。

の多い海水 DOM 試料に応用するために、まずは海水 DOM のアミノ酸をきれいに分析する手法の開発から取り組みました。ハワイ沖航海やカリフォルニア沿岸臨海実験施設などフィールドにも何度か出て、DOM や POM の採取も行いました（写真はハワイ沖航海のもの）。そして貧栄養海域（ハワイ沖）と沿岸湧昇域（カリフォルニア沖）の分析結果を比較することで、海洋有機窒素の循環について興味深い知見が得られてきました。数千リットルもの海水から DOM や POM を濃縮する手法、海水から植物プランクトンや微生物の細胞をソーティングする手法など、新たな技術も学ぶことができました。

1 年半はあっという間でしたが、研究テーマの幅を広げることができ、海洋有機物のアメリカの研究コミュニティに多くの知り合いもでき、収穫の多い滞在だったと感じています。UCSC での研究では「大学院時代と同様の手法（アミノ酸分析）で、新たな対象（海水有機物）を研究する」というアプローチを取りましたが、帰国後は逆に「これまでとは別の手法（DNA 分析）で、大学院時代と同様の対象（海洋堆積物）を研究する」ことで、研究テーマの幅をまた別のベクトルで広げていきたいと考えています。

Overseas Report

本ニュースレター編集委員である大場が、自分の研究紹介も兼ねまして、2014 年春に参加した学会についての報告をさせていただきます。

Faraday Discussions ってご存知ですか？

大場 康弘（北海道大学低温科学研究所）

今回の Overseas Report は 2014 年 4 月にオランダのライデンで開催された「Faraday Discussion 168, Astrochemistry of Dust, Ice and Gas」という一風変わった学会の参加報告をさせていただきますと思います。

春先には色とりどりのチューリップが咲き乱れる（写真）オランダの西部に位置するライデン（Leiden）は歴史ある街で、画家のレンブラントの生地としても有名です。そのライデンで開催された Faraday Discussion 168 は、ほかの多くの学会とは毛色が異なり、その名が示す通り「Discussion」することを目的とした学会です。一般的な国際学会の口頭発表では、学会の種類にもよりますが、発表時間が 15～20 分程度で、その後質疑応答が 5～10 分程度設けられているのではないのでしょうか。

ところが Faraday Discussions では、発表時間が 5 分で質疑応答時間が 25 分という、なんともアンバランスな構成になっています。この学会に参加された経験のない方はきっとこう思うでしょう：たった 5 分の発表で 25 分も議論



学会会場に近い民家のチューリップ畑

できるのか？しかし、実際に参加してみると、25 分でも足りない場合があるほど議論が白熱するのです！

ただこれにはカラクリがありまして、学会の 5 か月前までに発表内容をフルペーパーとして投稿しなければならないのです。投稿した論文は当然他の学会・論文で（基本的には）未発表でなければならず、一般的な論文と同様に peer review を経ることになります。そうして accept された論文のプレプリントが学会の 1 か月ほど前に全参加者に送られ、全参加者は学会前に全口頭発表者の論文に目を通すことが要求されます。そして学会当日には 5 分間の簡単な論文概要紹介を発表者がおこない、その後、研究内容についての「長い」質疑応答が行われます。さらに、発表時におこなわれた質疑応答はすべて記録され、その質疑応答も Faraday Discussions のコンテンツとして同じ巻号にページ数を付されて掲載されます。

私はいざこの学会に申込み、論文採用までどうにか至ったものの、学会当日まで心が休まるときはありませんでした。当日どのように学会が進行するのか、世界中の専門家からどのような質問が来るのか・・・など、未知数なことばかりでした。とにかく何度も自分の論文を読み込み、質問回答用のスライドを何十枚と作製し、頭の中で質疑応答をシミュレーションして、当日に備えました。

さて、ここで今回参加した Faraday Discussion 168 のテーマについて、私の研究テーマと合わせて紹介させていただきたいと思います。私はこれまでにおもに生命誕生以前の化学進化について研究してまいりました。本学会のテーマは「Astrochemistry of Dust, Ice and Gas」というタイトルが示すように、宇宙における星間塵（ダスト）や氷、気相に存在する分子に関係する chemistry です。私は極低温（～10 ケルビン）星間塵表面における過酸化水素と水素原子の反応による水分子生成（ $\text{H}_2\text{O}_2 + \text{H} \rightarrow \text{H}_2\text{O} + \text{OH}$ ）に関する実験結果を報告いたしましたが、ほかの研究者の発表で

は私のような実験を主とする研究（有機・無機分子生成・固体表面原子拡散など）に加え、天文観測による複雑有機分子の検出や新しい手法による分子分光、そして計算機による数値シミュレーションに関する結果など、多様な研究成果が報告されました。本学会の主題である Astrochemistry は、物理化学や表面化学、理論化学などさまざまな分野が融合した比較的新しい研究分野です。そのため、これまでの国内外の学会では分野外の研究者からも比較的兴趣を持ってもらえるテーマであると思いますが、一方では極低温・超高真空（ $\sim 10^{-8}$ Pa）という特殊な環境でのお話であるため、深い内容の質問を受けることは極めてまれで、いわゆる「お客さん」的な受け取られ方をされることが多いのが現実でした。その点では、本学会は関連の専門家ばかりが世界中から集まり、実りある議論ができる貴重な機会でしたので、怖さ半分、楽しみ半分という気持ちで参加しました。

さて学会当日の流れですが、口頭発表会場は一つなのですが、ひとつのテーマごとに区切られたセッションがあり、セッションごとに発表がおこなわれていきます。一つのセッションには 3～4 名の発表者がいて、発表者は一人ずつステージに登壇し、5 分のショートプレゼンテーションをおこないます。その後、発表者はステージに設置してあるひな壇に着席し、質疑応答をすぐに行うのではなく、次の登壇者のショートプレゼンテーションが始まります（その間、前発表者はひな壇でじっと待っています）。そしてセッションのすべてのプレゼンが終わると、座長によって「Discussion」の開始が宣言されます。Discussion は、参加者が挙手をして質問の意思を示すと座長が指名し、質問者は名乗ったのちに登壇中の発表者を指名して質問する、というスタイルです。質問にスライドを使って壇上から質問する方もいらっしゃいました。そのため、前述のように発表者それぞれに質問時間が 25 分あるというよりは、たとえばあるセッションに 4 人発表者がいれば、トータ

ル 100 分の質問時間が 4 人に対して割り当てられる、ということになります。つまり、最悪(?) 一人が 100 分間質問され続けるサンドバッグ状態になることもあるかもしれませんし、一方では 100 分間まったく質問されることなくただひな壇に座らされるという、研究者としては最悪の事態に陥ることもあるのです。実際に私が発表したセッションでは、ある一人の研究者に質問が集中し、時間の大半が彼の研究に関する議論に使われてしまいました。さらに、別の研究者にはまったく質問がありませんでした。私の研究については幸い適度な件数の質問があり、それに対しても無難に答えることができたと思っています。ただ、質問の集中砲火を受けたイタリア人のイケメン研究者はセッション後半には目がうつろで、見ていて気の毒になるほど憔悴していました（実は私たちのセッションの後、発表者に対する質問数に偏りがありすぎたということで、4 人のショートプレゼン後ただちにオープンディスカッションにするのではなく、発表者ひとりひとりに順番に、10 分程度の質問時間が設けられました。運営側も私たちのセッションの悲惨さを見るに堪えなかったのでしょうね）。

質問終了後、質問者にはただちにメールで質問内容を投稿するフォームが送られてきて、期日までにオンラインでジャーナルの web 上に投稿することが要求されます。それらの質

問はすべて発表者宛に送られ、発表者は各質問に対し、期日までに適当な引用文献や図表を用いながら文章で回答しなければなりません。それらのやり取りがすべて公にされるのです。質疑応答は全参加者が聞いていますので、下手なごまかしや虚偽の回答はできず、発表者は誠実な対応をしなければなりません。さらに当日質問しなくても、運営側が許可すれば質問を投稿することができますので、発表者が回答する質問数は、実際に会場で受けたものより増えることになります。

繰り返しになりますが、このようなスタイルの学会は珍しく、発表者は戦々恐々として参加することになります。しかし、終わったあとにはこれまでにない充実感を感じることができました（高インパクトファクターの論文も一報増えますしね!）。Faraday Discussions は化学全般を対象とした学会ですので、有機地球化学会の会員の皆さまであれば、きっと参加するチャンスはあると思います。もし一般的な学会の質疑応答に満足できなく、「刺激」を味わって見たければ、みなさんの関連分野の Faraday Discussions に参加してみてはいかがでしょうか? 経験者の一人として、強くお勧めします!

以下が発行された論文集です。ご参考まで。
<http://pubs.rsc.org/en/journals/journalissues/fd#!issueid=fd014168&type=current>

Invitation

次回の有機地球化学シンポジウムへの招待状が届きました！

次回の第33回有機地球化学シンポジウムは、2015年8月5日（水）～8月7日(金)の日程で、夏冷涼な気候の札幌にて開催いたします。会場は寒冷圏研究における拠点の一つである北海道大学・低温科学研究所にて、8月5日に運営委員会、8月6日～7日にシンポジウム本体を予定しています。

北海道の中心都市である札幌は190万人以上の人々が暮らす大都市にもかかわらず、豊かな自然にも恵まれているのが特徴で、全国住みたい街ランキングにおいても常に上位に位置している魅力溢れる街です。中心地には時計台や赤レンガ庁舎など歴史を感じさせる建物や北日本最大の繁華街である「すすき

の」がある一方で、すこし郊外に足を運べば藻岩山や円山など自然を満喫できるスポットが数多く存在します。さらに美食の街としても有名で、北の海でとれた新鮮な魚介類や札幌ラーメン、ジンギスカン、スープカレーなど数多くのご当地グルメが楽しめます。

次回のシンポジウムは、冷涼な気候の下で皆様の日頃の先端的研究や、個性、創造性のある、分野横断的な研究の発表機会となることを期待しております。

活発かつ建設的な議論の場として、多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。

（世話人：河村公隆、関幸）



「2014 年度総会」議事録

1. 日時：2014 年 11 月 6 日（木）18:20～19:50 ・ 会計処理・会員管理
2. 場所：ニューウェルシティ湯河原 4.1.2. 2013 年度会計報告：資料 1 参照
3. 議長選出：海洋研究開発機構 高野淑識
会員を議長に選出した。 4.1.3. 2013 年度会計監査報告
平井明夫監事が欠席のため、事務局より監査報告があった。平井監事による審査の結果、会計処理が正確に行われていると認められたことが報告された。
4. 議事内容 1：事業全般および承認事項
4.1. 2013 年度実施事業および会計報告
(2013 年 1 月 1 日～12 月 31 日)
以下の報告が事務局からあり、出席者の賛成多数により承認された。
4.1.1. 2013 年度事業報告
(1)Publication 関係
・ ニュースレターNo.56 (2013.1.11)、No.57 (2013.6.7) 発行
・ ROG Vol.29(2013.12)発行：78 ページ
(2)Meeting 関係
・ 学術賞受賞候補者選考委員会 (2013.6; email にて)
・ 田口賞受賞候補者選考委員会 (2013.7; email にて)
・ 運営委員会 (2013.8.18; 倉敷市倉敷公民館、email にて随時)
・ 第 31 回有機地球化学シンポジウム (2013.8.19～8.20; 倉敷市芸文館)、巡検(8/21)
・ 総会 (2013.8.19; 倉敷市芸文館)
・ ROG 編集委員会
・ 記念出版物編集委員会
・ 将来計画委員会
(3)事務局関係
・ ROG の電子化：28 号；「電子図書館」で公開、28 号；学会 HP で公開
・ 賛助会員の勧誘・ROG の販売促進・シンポジウム協賛の勧誘 4.2. 2014 年度事業・会計中間報告 (2014 年 1 月 1 日～12 月 31 日)
以下の報告が事務局からあり、出席者の賛成多数により承認された。
4.2.1. 2014 年度実施事業：中間報告 (2014 年 1 月 1 日～2014 年 10 月 31 日)
(1)Publication 関係
・ ニュースレターNo.58 (2014.1.7)、No.59 (2014.8.13) 発行
(2)Meeting 関係
・ 運営委員会 (email にて随時)：
・ 学術賞受賞候補者選考委員会 (2014.9; email にて)
・ 田口賞受賞候補者選考委員会 (2014.9; email にて)
・ ROG 編集委員会
・ 記念出版物編集委員会
・ 将来計画委員会
(3)事務局関係
・ ROG 電子化 (29 号の「電子図書館」および学会 HP での公開)
・ 賛助会員の勧誘・ROG の販売促進・シンポジウム協賛の勧誘
・ 会計処理・会員管理 4.2.2. 2014 年度実施事業：今後の計画 (2014

一般会計

大項目	小項目	2012年度	2013年度			
		決算	予算	中間見通し	決算	増減(対中間)
収入	賛助会費	210,000	200,000	200,000	200,000	0
	個人会費	93,000	240,000	343,000	377,000	34,000
	ROG販売	35,960	50,000	12,080	8,660	-3,420
	シンホ協賛金・剰余金	86,821	50,000	60,000	60,000	0
	利子ほか	222	100	285	316	31
	計	426,003	540,100	615,365	645,976	30,611
前年度繰越金		1,343,715	1,694,303	1,694,303	1,694,303	
	総計	1,769,718	2,234,403	2,309,668	2,340,279	30,611
支出	ROG印刷費	0	300,000	459,600	159,600	-300,000
	送料	18,170	30,000	30,000	10,720	-19,280
	HPオンライン化維持費	51,555	28,000	27,675	27,615	-60
	シンポジウム予備費	0	50,000	50,000	0	-50,000
	事務局経費	5,270	30,000	10,000	1,260	-8,740
	雑費	420	30,000	18,610	58,820	40,210
	計	75,415	468,000	595,885	258,015	-337,870
次年度繰越金		1,694,303	1,766,403	1,713,783	2,082,264	368,481
	総計	1,769,718	2,234,403	2,309,668	2,340,279	30,611

田口基金へ5万円貸出、2014.5.16返却

前年度繰越金は2012年度決算により修正(次年度繰越金も連動)

田口基金						
大項目	小項目	2012年度	2013年度			
		決算	予算	中間見通し	決算	増減(対中間)
収入	利子	32	30	22	22	0
	借入	0	0	0	50,000	50,000
前年度繰越金		1,734,511	1,684,543	1,684,543	1,684,543	
	総計	1,734,543	1,684,573	1,684,565	1,684,565	0
支出	副賞(田口賞)	50,000	50,500	50,000	50,000	0
次年度繰越金		1,684,543	1,684,073	1,634,565	1,634,565	0
	総計	1,735,453	1,684,573	1,684,565	1,684,565	0

一般会計より5万円借用、2014.5.16返却

前年度繰越金は2012年度決算により修正(次年度繰越金も連動)

資料1 2013年度会計報告

年11月1日～2014年12月31日)

(1)Publication 関係

- ・ ROG Vol. 30 発行

(2)Meeting 関係

- ・ 運営委員会 (2014.11.5; ニューウェルシティ湯河原、emailにて随時)
- ・ 第32回有機地球化学シンポジウム (2014.11.6～11.7; ニューウェルシティ湯河原)
- ・ 総会 (2014.11.6; ニューウェルシティ湯河原)
- ・ ROG編集委員会
- ・ 記念出版物編集委員会

- ・ 将来計画委員会

(3)事務局関係

- ・ 会計処理・会員管理・ホームページの更新

4.2.3. 2014年度会計中間報告(2014年1月1日～8月31日)および見通し(2014年9月1日～12月31日):資料2参照

4.3. 2015年度事業・会計計画(2015年1月1日～12月31日)

以下の内容について事務局から説明があり、出席者の賛成多数により承認された。

一般会計

大項目	小項目	2014年度					
		当初予算	修正予算	上期実績	下期見通し	増減	コメント
収入	賛助会費	200,000	210000	210000	0	10000	
	個人会費	240,000	266000	66000	200000	26000	
	ROG販売	50,000	12082	2082	10000	-37918	
	シホ協賛金・剰余金	50,000	50000	0	50000	0	
	利子ほか	100	60414	60214	200	60314	田口基金より返済、下山氏より寄付
計		540100	598496	338296	260200	58396	
前年度繰越金		2082264	2082264			0	
総計		2622364	2680760			58396	
支出	ROG印刷費	300,000	584800	284800	300000	284800	
	送料	30,000	39450	19450	20000	9450	
	HPオンライン化維持費	28,000	27780	3780	24000	-220	
	シンポジウム予備費	50,000	50000	0	50000	0	
	事務局経費	30,000	30000	0	30000	0	
	雑費	30,000	10216	216	10000	-19784	
計		468000	742246	308246	434000	274246	
次年度繰越金		2154364	1938514			-215850	
総計		2622364	2680760			58396	

前年度繰越金は2013年度決算により修正（次年度繰越金も連動）

田口基金

大項目	小項目	2014年度					
		当初予算	修正予算	上期実績	下期見通し	増減	コメント
収入	利子	20	22	11	11	2	
前年度繰越金		1684565	1684565			0	
総計		1684585	1684587			2	
支出	副賞（田口賞）	50500	50000	0	50000	-500	
	借入金返済		50000	50000	0	50000	一般会計へ返却
次年度繰越金		1634085	1634587			502	
総計		1684585	1684587			2	

前年度繰越金は2013年度決算により修正（次年度繰越金も連動）

資料 2 2014 年度会計中間報告

4.3.1. 2015 年度事業計画

(1)Publication 関係

- ・ ニュースレターNo.60、No.61 発行
- ・ ROG Vol. 31 発行

(2)Meeting 関係

- ・ 第 33 回有機地球化学シンポジウム
- ・ 総会
- ・ 運営委員会
- ・ ROG 編集委員会、記念出版物編集委員会、将来計画委員会

(3)事務局関係

- ・ 賛助会員の勧誘・ROG の販売促進・シンポジウム協賛の勧誘
- ・ 会計処理・会員管理・ホームページの更新・ROG 電子化
- ・ （役員選挙）

4.3.2. 2015 年度会計計画：資料 3 参照

4.4. 役員改選について

資料 4 に示す役員改選の提案（赤字が新役員および新役職）が事務局よりあり、出席者の賛成多数により承認された。

5. 議事内容 2：各委員会活動報告

5.1. 学術賞選考委員会

鈴木徳行委員長より、以下の学術賞選考結果の報告があった。

- ・ 受賞者：三瓶 良和 会員
- ・ 所属・職名：島根大学大学院総合理工学研究科 地球資源環境学領域・教授
- ・ 研究題目：石油天然ガス根源岩の堆積環境に関する有機地球化学

一般会計

大項目	小項目	2013年度	2014年度	2015年度	コメント
		決算	修正予算	予算	
収入	賛助会費	200,000	210,000	200,000	7社10口
	個人会費	377,000	266,000	180,000	
	ROG販売	8,660	12,082	30,000	
	シンポジウム協賛金	60,000	50,000	60,000	6社6口
	利子	316	60,414	100	
	計	645,976	598,496	470,100	
前年度繰越金		1,694,303	2,082,474	1,938,724	
総計		2,340,279	2,680,970	2,408,824	
支出	ROG印刷費	159,600	584,800	300,000	31号70ページ想定
	送料	10,720	39,450	30,000	
	HPオンライン化維持費	27,615	27,780	28,000	
	シンポジウム予備費	0	50,000	50,000	
	事務局経費	1,260	30,000	30,000	
	雑費	58,610	10,216	30,000	
	計	257,805	742,246	468,000	
次年度繰越金		2,082,474	1,938,724	1,940,824	
総計		2,340,279	2,680,970	2,408,824	

田口基金

大項目	小項目	2013年度	2014年度	2015年度	コメント
		決算	修正予算	予算	
収入	利子	22	22	22	
前年度繰越金		1,684,543	1,634,565	1,584,587	
総計		1,684,565	1,634,587	1,584,609	
支出	副賞(田口賞)	50,000	50,000	50,000	
次年度繰越金		1,634,565	1,584,587	1,534,609	
総計		1,684,565	1,634,587	1,584,609	

資料3 2015年度会計計画

- 研究業績：
 - 論文：83編（うち、査読有51編、査読無32編）
 - 著書等：4編（全て分担執筆）
 - 報告書等：7編（有機地球化学・石油地質学に関するもの）
- 研究業績：
 - 公表論文3編
 - 査読中論文（3編）
 - 国際学会における発表（6件）
 - 国内学会における発表（8件）

5.3. ROG編集委員会

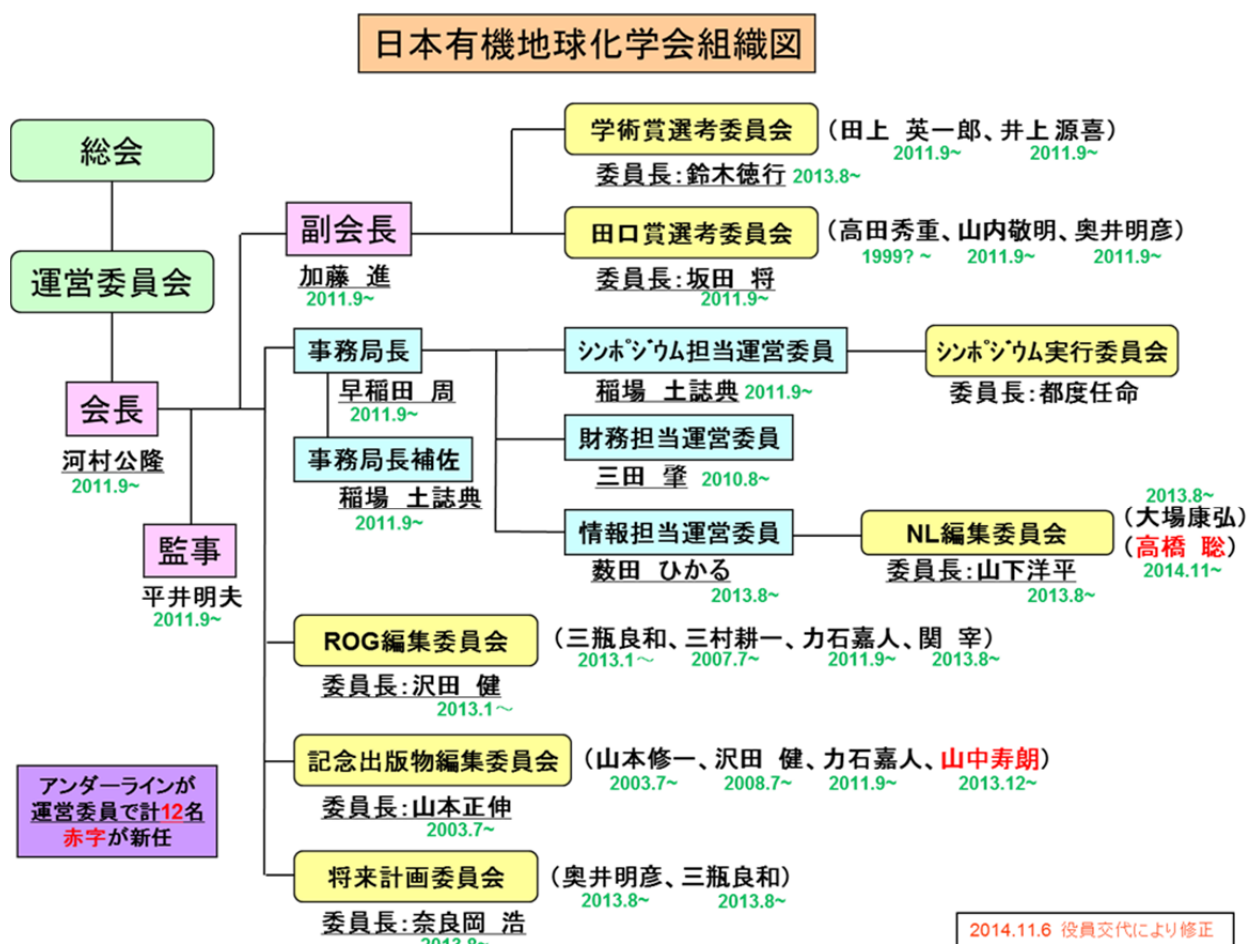
沢田委員長より、以下の報告があった。

5.3.1. ROG30号編集状況

5.2. 田口賞選考委員会

坂田委員長より、以下の田口賞選考結果の報告があった。

- 受賞者：齊藤 諒介 会員
- 所属・職名：東北大学大学院理学研究科博士課程学生（後期課程2年）
- 研究題目：ペルム紀末大量絶滅直後の前期-中期三畳紀の酸化還元環境と生物の復元
- 投稿論文：論文1、短報1、技術論文
 - そのうち、論文1が受理。
- 田口賞受賞論文（金子さん）、北大から1～2報投稿予定。
- 2014年12月発刊予定。



資料4 役員組織図

5.3.2. ROG30号(30周年)企画

- 企画1「有機地球化学のこれまでの歩みと現在、そして未来」(仮題)
- 日本有機地球化学会の創成期・初期にご活躍された世代の方々のご協力を得て、各々の有機地球化学の専門領域のこれまでの歩みと、現在・将来において重視すべき研究テーマ、そして未来のために残したいことをまとめた論文・総説を毎号1~2つ掲載する。
- 執筆者はROG編集委員会で決めて、執筆依頼する。または、ご本人が執筆をご希望され投稿された場合には受け付ける。この企画の投稿論文・総説もすべて査読プロセスを入れる。
- 来年度号からの掲載を検討する。

- これまでのROGの表紙は20号から10年続けてきたが、30号を機に変更する。
- その年のROGに受理された論文のうちから、象徴的な図・イラストをROG編集委員会で選択して、場合によってはイラスト的に体裁を作り替えて、表紙デザインにする。
- ROG30号から施行する予定。

5.3.4. その他の変更案、質疑

- ページ数を付けずに受理された論文からオンラインで迅速に出版する。
- Impact Factorにカウントされるようにトライする。
- 冊子サイズのA4化
- 号ではなく巻として、30巻のNo.1, No.2のように分冊して発刊できるようにする。

5.3.3. 企画2「ROGの表紙の刷新」

- DOI は付くのか？→J-Stage に掲載されれば DOI が付く。

5.4. 記念出版物編集委員会

山本委員長より、以下の報告があった。

5.4.1. 経緯

- 2013 年 8 月 運営委員会（岡山）にて企画案が承認された。
- 2013 年 9 月 記念事業出版・マニュアル編集委員会（テネリフェ）にて電子出版にむけての具体的方法、委員の役割分担を検討した。
- 2013 年 12 月 山中寿朗氏（WEB 担当）が委員として承認された（メール会議）。
- 2013 年 12 月 WEB ページ完成。運営委員会で承認された（メール会議）。
- 2013 年 12 月 ROG 技術論文バックナンバーの pdf 化
- 2014 年 1 月 マニュアル WEB ページの公開（別添資料）、原稿募集、ROG 技術論文バックナンバーの公開を行った。
- 2014 年 3 月-11 月 各部の編集を進行中。

5.4.2. 編集状況

- 第一部：7 項目の原稿の投稿があり、2 項目分の原稿の査読を受理（10/21 時点）。この 7 項目は本年内に公表可能。
- 第二部：執筆希望受付。ひな形作成中。
- 第三部：ROG 技術論文の記述を土台に書式を検討中。長鎖 n-alkyl lipids を例にひな形を作成中。
- 第四部：執筆希望受付。ひな形作成中。
- 数年後の全項目出版を目指す。
- 上記と平行して、lipid 分析をやったことの無い学生で、それに興味を持っている何人かの学生に、実験室で

作業（lipid の抽出→GC/MS 解析）を実施し、マニュアルにどんな情報が入ると学生にとって有用であるのかを調査した（力石）。これをマニュアル編集に活かす予定。Teaching（教えるときのポイント）をマニュアルに盛り込むことも考慮中。

5.5. 将来計画委員会

奈良岡委員長より、会則改定の提案があり、若干の修正のうえ、下記の内容で出席者の賛成多数により承認された。

- 役員の選挙に関する会則の改定
 - 趣旨：今後のさらなる会の発展のためには、民主的に役員を選ぶ形にした方が良い。
 - 昨年の総会で役員選挙実施の方針が了承される。
- 改定案
 - 第 10 条 役員は総会において正会員の中から選ぶ。
→役員は**別に定める選挙細則により**、正会員の中から選ぶ。
 - 第 11 条 役員の任期は原則 2 年間とし、総会での承認をもって任命する。また再選は妨げない。
→役員は総会で任命する。任期は原則 2 年間とし、**選挙の翌年 1 月 1 日に始まる**。再選は妨げない。
- 選挙細則については検討中。今後、詳細を決定し、2015 年度の選挙実施を目指す。
- 質疑
 - 今までなぜ選挙をしなかったのか？
→これまでも懸案事項であった。選挙実施により開かれた学会を目指したい。
 - 立候補だけでなく複数候補を推薦するなど、無理のないように実施して欲しい。
→候補者リストを作る予定である。
これまでと大きな流れは変わらず

ない予定である。

5.6. 口座移設を可能にするための会則改定の提案

事務局より、以下の提案があり、第4条の改定については出席者の賛成多数により承認された。第14条の改定については、下記の議論の末、来年の総会に持ち越された。

- ・ 口座移設を可能にするための会則改定

- 現現状の会則では、任意団体あるいは人格なき法人としての要件を満たさず、ゆうちょ銀行などの口座開設など種々の手続きが困難になっている。

- 「人格なき法人」として口座開設にあたっての認定要件

(1) 構成員の資格を明示すること。＜第4条＞

(2) 会の所在地を明示すること。＜第13条＞

(3) 設立日を明示すること。＜新第14条＞

- そこで、下記のように会則を改定し、上記(1)および(3)に対応したい。(2)への対応は来年度の役員改選の際に行いたい。

- ・ 改定案

- 第4条 本会の会員は次の4種とする。

→第4条 本会の会員は、**本会の目的に賛同し事業に参加する者で、運営委員会の承認を受けた者とし、**次の4種とする。

- 第14条 本会会則の変更は総会で決定する。

→**第14条 本会の設立日は昭和60年10月7日とする。**

第15条 本会会則の変更は総会で決定する。

- ・ 質疑

- 本会の設立は有機地球化学談話会が

設立された1972年10月まで遡ることができる。設立日はこの日にした方が良い。

→承知した。正確な設立日を後日調べた上、第14条の改定については来年の総会で再度提案する。

6. 議事内容3：その他、報告事項

以下の各種報告が事務局よりなされた。

6.1. 来年度のシンポジウム開催場所

- ・ 大阪大学（世話人：藪田会員）が候補として上がっていた。さらに昨日の運営委委員会で河村会長から北海道大学低温科学研究所で開催可能との意思が示された。
- ・ 調整の結果、来年度は北海道大学低温科学研究所（世話人：河村会長）でお願いすることになった。再来年度は大阪大学での開催を予定している。

6.2. 会員の状況（2014年11月5日時点）

- ・ 入会：15名
- 正会員：浦井 暖史、川島 洋人、菅原 春菜（3名）
- 学生会員：板橋 悠、養田 太一、宮田 遊磨、盛 貴瑛、阿部 涼平、福村 朱美、滝沢 侑子、中國 正寿、中富 伸幸、島田 学、井下 喜美華、鈴木 健太（12名）
- ・ 退会：5名
- 正会員：平野 弘道（ご逝去；2014年5月）、佐藤俊二、狛 武、米谷 宏
- 学生会員：角 勇樹
- ・ 除籍：15名
- 正会員：木佐森 聖樹、平田 伸一、Parli Bhaskar（3名）
- 学生会員：高橋 功治、松嶋 亮輔、下村 明希子、北野 純一、村田 朋也、澤田 秀貴、猿渡 隼人、谷津 進、小野 槇子、野本 光一、熊谷 現、川島 実香（12名）

- ・ カテゴリー変更:3 名
- 学生→正会員：中田 亮一、緒方 秀仁
- ・ 現況：178 名（2013 年度 183 名）
- 正会員：122 名（2013 年度 124 名）
- 学生会員：43 名（2013 年度 46 名）
- 名誉会員：6 名（2013 年度 6 名）
- 賛助会員：7 社（2013 年度 7 社）

6.3. 名誉会員

今年度は以下の会長経験者 2 名を名誉会員に推薦する案を事務局から運営委員会に上程したところ異議なく承認された。

福島 和夫 会員：2004 年～2006 年 会長
田上 英一郎 会員：2007 年～2011 年 会長

6.4. 他学会からの共催依頼

6.4.1. 日本地質学会 堆積部会所属 4 セッション（2014 年 9/14-16@鹿児島大学）

昨年に引き続き地質学会の「石油・石炭地質と有機地球化学」セッション世話人の産総研の金子信行会員から、堆積部会所属の下記 4 セッション共催の検討依頼があり、2014 年 3 月 24 日に運営委員会にメールで上程。反対意見はなかったため共催受諾を決定。3 月 31 日に受諾書をメールで送付。6 月 6 日にメールで会員に告知。なお、本共催に関して本学会の経済的な負担はない。

- ・ 石油・石炭地質と有機地球化学

- ・ 堆積物（岩）の起源・組織・組成
- ・ 炭酸塩岩の起源と地球環境
- ・ 堆積相・堆積過程

共催により、本学会会員は、これらのセッションで発表が可能となり、参加登録費が地質学会会員と同額となる。共催以外のセッションへの参加することもできる。

6.4.2. 国際第四紀学連合（INQUA）第 19 回大会（2015 年@名古屋）

日本第四紀学会から河村会長宛に共催依頼があり、2013 年 5 月 9 日に運営委員会にメールで上程。反対意見がなかったため、5 月 14 日に受諾の旨、書類で回答。2013 年総会で会員に告知済み。本学会の経済的な負担はない

- ・ 主催：国際第四紀学連合、日本第四紀学会、日本学術会議（予定）
- ・ 開催期日・会場：2015 年 7 月 27 日～8 月 2 日、名古屋国際会議場
- ・ セッション数：約 100
- ・ 予定参加者数と国数：約 1100 名、約 50 ケ国

6.5. 国際学会の紹介

2016 年 6 月 26～7 月 1 日に横浜で開催されるゴールドシュミット会議の紹介および参加の呼びかけがあった。

以上

年会費納入のお願い

会員の皆様には日頃よりご支援いただき、誠にありがとうございます。本学会は、1 月より新しい会計年度になっております。新年度の会費の納入をよろしくお願い致します。また、本年度までの年会費を納入いただいていない方は、併せて納入いただけますようお願い致します。

年会費： 正会員 2,000 円

学生会員 1,000 円

振込み先： 郵便振替口座 00110-7-76406
(名義人：日本有機地球化学会)

最終納入年度の分からない方、銀行口座よりの送金をご希望の方、所属機関より納入さ

れるなど会員登録名以外でお振込みの方は、事務局財務担当の三田 (mita@fit.ac.jp) までお知らせください。

※学生会員の方へ

これまで学生会員の方で、卒業・修了された時は、事務局までお知らせください。本会の会計年度は1月より始まりますので、この3月末に卒業・修了される方は、学生会員の年会費で結構です。

※異動・転居された方へ

職場や自宅が変わられた方は、会員管理と会誌郵送のために、新しい住所、電話番号等を事務局までご連絡下さい。また、E-mail アドレスをお持ちの方は、ニュースレターのメール配信等のため、差し支えない限り、E-mail アドレスを事務局 (secret08@ogeochem.jp) までお知らせ頂くようお願い致します。

Announcement

有機地球化学賞（学術賞）2015 年度受賞候補者推薦の募集

有機地球化学賞（学術賞）2015 年度受賞候補選考委員会

委員長 鈴木徳行

有機地球化学賞（学術賞）受賞者選考規則により、選考候補者の推薦を募集いたします。つきましては、下記をご参照のうえ受賞候補者をご推薦ください。

記

候補者の資格：有機地球化学の研究分野で顕著な学術業績をあげた本会会員。

募集の方法：本会会員の推薦による（自薦他薦を問いません）。

推薦の方法：下記の事項を A4 サイズの用紙に任意の様式で記入し、書留で郵送すること。（同内容のものを電子メールでも提出してください）

- 1) 候補者の履歴（大学卒業以降の学歴、職歴、その他）推薦の対象となる研究題目および推薦理由

2) 研究業績目録（推薦の対象となる主要な論文 10 編）

3) 推薦者の氏名と連絡先

締め切り日：2015 年 5 月 31 日（日）（当日消印有効）

提出および問い合わせ先：〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 8 丁目

北海道大学 理学院 理学部 自然史科学部門
地球惑星システム科学分野

鈴木 徳行

電話・ファックス：011-706-2730

E-mail：suzu@sci.hokudai.ac.jp

これまでの受賞者と研究題目については
<http://www.ogeochem.jp/archives.html>

（日本有機地球化学会 H P 「学会アーカイブス」）をご覧ください。

研究奨励賞（田口賞）2015 年度受賞候補者の募集

研究奨励賞（田口賞）2015 年度受賞候補選考委員会 委員長 坂田 将

研究奨励賞（田口賞）受賞候補者選考規則により、同賞受賞候補者推薦を募集いたします。つきましては下記をご参照のうえ、受賞候補者をご推薦下さい。

記

候補者の資格：生年月日が1981年4月2日以降であり、有機地球化学、石油地質学、堆積学の3分野のいずれかで優れた研究を行い、将来にも研究の発展を期待できる方。本会会員に限りません。

募集の方法：本会会員の推薦による（自薦他薦を問いません）。推薦の方法：A4サイ

ズの用紙に下記事項を任意の形式で記述し、郵送するか、PDFファイルとして E-mail に添付してお送り下さい。

- 1) 推薦理由及び研究題目
- 2) 研究論文の別刷りまたはコピー
- 3) 履歴書
- 4) 推薦者の氏名と連絡先

締め切り日：2015 年 5 月 31 日（日）（当日消印 有効）

提出及び問い合わせ先：〒305-0821 茨城県つくば市東1-1-1 中央第七 地圏資源環境研究部門 坂田 将

電話：029-861-3898

ファックス：029-861-3666

E-mail : su-sakata@aist.go.jp
これまでの受賞者と研究題目については
<http://www.ogeochem.jp/archives.html> (日本有機

地球化学会 HP「学会アーカイブス」) をご覧
ください。

ROG Vol.30 へ論文を投稿しましょう！！

Researches in Organic Geochemistry
編集委員長 沢田 健

ROG (Researches in Organic Geochemistry)は本学会の学会誌であり、有機地球化学およびそれに関連する分野の研究論文を掲載し、年1回発行しております。ROG30 巻(Vol. 30)は、2014 年 12 月 30 日発行で、2015 年 1 月に本学会会員の皆様の下にお届けできると思います。今巻は記念すべき 30 巻ということで、表紙の形式が変わります。これまでの表紙は ROG20 巻から 9 年間続けてきましたが、30 巻からは毎巻、表紙のデザインが変わります。その巻に掲載される論文のうちから、象徴的な図を ROG 編集委員会で選択して、場合によってはイラスト的に体裁を作り替えて、表紙デザインにしていきます。つまり、'Nature'のような形式に表紙が変わります。ROG30 巻が届いたら、表紙の印象等について、編集委員会にご意見・ご感想をお寄せくださると幸いです。また、ROG 創刊 30 周年企画として特集も検討しております。31 巻以降に企画特集の論文を掲載する準備を進めております。皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

さらに、ROG31 巻から年間 2~3 号の複数回の発行に変わります。これまでは年 1 回発行であったために、論文が受理されてから公開までに、論文によっては半年以上の長い期間がかかりました。この状態を解決するべく、受理された論文を PDF 形式でなるべく早めに Web 上で公開します。つまり、Web Journal の形態を導入して年間複数号を発行し、論文を

公開していきます。ただし、ROG 冊子体はこれまで通り、年 1 回印刷・製本して皆様に郵送します。ROG31 巻(Vol. 31) 1 号(No. 1)は 2015 年 4 月頃、2 号(No. 2)は 2015 年 10 月頃に公開する予定で進めていきます。皆様からの積極的な論文投稿をお待ちしています。

ROG の論文のカテゴリーはこれまで通り、1) 論文(article)、2) 短報(short article)、3) 技術論文(technical paper)、4) 総説(review)です。有機地球化学会シンポジウムで発表された内容や、博士論文・修士論文成果の発表なども歓迎いたします。詳細は、ROG30 巻の巻末の投稿規定をご参照ください。また、上記の枠に入らない論文や企画でも、有機地球化学の発展に貢献し、学会員にとって有意義な論文・企画であれば、随時、編集委員会で検討を進めます。積極的に編集委員会にお問い合わせ下さい。その他、いろいろなご意見、ご要望、ご感想をお寄せください。ご投稿・ご連絡は下記までお願いいたします。

PDF 添付ファイルによる電子投稿 :
sawadak@mail.sci.hokudai.ac.jp
郵送 : 〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 8 丁目
北海道大学大学院・理学研究院
自然史科学部門・地球惑星システム科学分野
沢田 健 編集委員長宛
(TEL: 011-706-2733, FAX: 011-746-0394)

編集後記：

新企画の提案、ご寄稿などございましたら、いつでも編集委員にご連絡下さい！！（山）

本号の Overseas Report は私が執筆しましたが、ぜひ皆様からのご寄稿をお待ちしております（大）
今年度から担当させていただきます、どうかよろしくお願いいたします（高）

発行責任者 有機地球化学会会長 河村 公隆

〒060-0819 札幌市北区北 19 条西 8 丁目 北海道大学低温科学研究所

Phone: 011-706-5457、 Fax: 011-706-7142

日本有機地球化学会事務局

〒261-0025 千葉県千葉市美浜区浜田 1-2-1

石油資源開発(株) 技術研究所 内

事務局長 早稲田 周

Phone: 043-275-9311, Fax: 043-275-9316

e-mail: office@ogeochem.jp

郵便口座 00110-7-76406（名義人 日本有機地球化学会）

編集者 山下 洋平（北海道大学大学院地球環境科学研究院）大場 康弘（北海道大学低温科学研究所）高橋 聡（東京大学大学院理学研究科）

e-mail: news@ogeochem.jp

有機地球化学会ニュースレターはホームページでもご覧になれます。

アドレス：<http://www.ogeochem.jp/>